



新著文集  
 卷三

13  
 115  
 3







新著聞集

崇行篇第五



歌才少女之川如松雪と号す

了然禪尼面と焼て法とをわきし

禪尼面と焼き詠歌法を承く

洛陽高譽上人

音譽上人之川如火車に乗ほ

壯女法をきく頓て安養を慕

寅歳和尚金を捐經を修



善真法師榮と嫌ひ乞食す

幡隨和尚耶宗と教化す

乞食自害して歌とのろす

靈合山閑唱阿闍梨

願西身と責香烟了佛と現す

三海上人平と祈る雷と鎮す

父誦經娘咏歌

武夫姓と重んず

超譽松と植呪鳴蛙喧



安藝以八和尚

伊豆即往法師

山崎宗鑑

戲僧遺書

木村長門寺最期雪操

不破萬作戀情



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 松雪 and 和歌.

歌才少女うたさいしょうじよの号なごうが松雪まつゆきと号す

伊勢乃國いせのくに何氏なにうぢの娘むすめ一ひと犬いぬといふ者ものなり本性ほんせいなり  
和歌わがと好このなり後のち乃朝のあさの意いといふ題だいして

十三歳じゅうさんさいの齡いし元禄十年正月げんろくじゅうねんしょうげつ小多こた海うみより来るくるがゆ  
後のち母はは乃のいとむも悟しるて何なにる僧そうを招まねき我わが亡なき名な  
と松雪まつゆきと賜たまひれけりし比ひ松まつの雪ゆきといふ題だい少すくて歌うた  
よもけりあるとて

あはれや志しの溪松せきまつの山やまも今いま一ひとの雪ゆきれ海うみの







る海を焼爛ヤキタムし和尚ヤシヤウを参りしるはそれ懇志コンシを  
かく感カし大法大法めりりままく附受ツキウりし詩歌シカを賦フ  
して呈テイしる

昔遊宮裡焼蘭麝ウキウキミヤウチヤウケンニョウ今入禪林燎面皮イマニシヤンリンリョウメンヒ

四序流行更無跡シヨウリウコウモウモウキ不知誰是箇中移フシヤクニシカニチウシ

いもろそろ捨てそそやうゆ海ウミの藪ヤブにたゆせ

爛ランれりる痲頓マダンて愈ユてすじも痕キズつらりしそ亦また

奇特キツクのり也なりいそりらうそいそりらうる念ニエンといふに自精舎ジキョウカ

と述ニすし一乘院イツジョウインと号ナヅケし尼衆ニジョウを集ツグめ法ホウと説トクし也なり

禪尼面と焼詠歌法と承

いり甲州鹽山カウシウシヤン法身ホウシン和尚ヤシヤウとて高僧コウソウの妹イモあり

禪尼シヤニねりなりとるふ才智人サイチニン超ス節操セツソウたぐひあり

しがど美麗イロハシのまろく有アて世ヨ乃ナ誹避ヒイビあづし

師シ乃ナ宣ノしりりとるふふとむとむひひと鉄火テツカと面オモりりと

和歌と詠エイし

我面恨ワケオモとそやくやくと鹽シヤの山ヤマ海士カイシのたぐ火ヒとやや然シ

かへ師シのまろくろくとるふふとむとむひひと頓ダンて奥義オウギと傾ツクる

しと授ツクたむたむししとるふふとむとむひひと



洛陽高譽上人

洛陽大雲院乃高譽上人ハ説法の大師師にて  
世了名高き人としてたりしき幼き時より書と  
讀しりて時の貴僧鉅儒達了りしを稱嘆有り  
しりや浄土の奥儀とてきりぬるものなり  
也天台真言俱舎唯識の精きるものもて搜求  
内外の群典抄す雜渉しぬしぬ三千の書  
の何れも誦し説法利生と業とし聲るる  
辨美しりて一度法の席に列する華ハ郭と

推き信と起さるるハありし向阿上人の三部假名  
抄と演へらぬ一冊ハ化人乃老婆向阿乃手  
書しぬしあり往生至要訣とてしりて  
と持ちぬるせありし後九條乃里り菴とて  
開元しぬしり河和州當麻寺乃蔓荼羅ハ  
年千霜に及しぬしり損壞しぬし末の  
世乃結縁もスしりゆもるもて憂悲し  
いりしり補しぬるせ度とて延宝五年五  
月人こを伴て當麻下りしりぬ中古源の頼



朝公の寄附ありし神厨子に蓮糸丸大曼茶  
羅と張りて四百有余乃春秋と陰ぬれと板と  
剥して往古乃と軸とかけ巻物とせんすれ工  
も一向の叶いかくては縁うい既止りんと  
せし時愛相の上の帛と張漆并乃水と洗をが  
草心と二の祈願のきしに一夜影あふる  
ありて翌朝自然に板と離れく巻下り一點も  
疵なきふぬけりし板及し表り張り帛と小  
本曼茶羅乃ありくにぬれ莊嚴なりなり

ゆつと移りありしきとせし兼て粗増に彩  
具とありと調へ揃へかの缺とんしとふと  
んせしに何とせしと色合似たりし是は  
ありすと素し頼みおと徒弟一兩人二上り  
ありしと鋤と擔へる一人乃走走りしは  
語て日あつら大曼茶羅修復の承し  
繪乃具とありしとありしと来りて  
森り導すき是も熊野新宮鎮坐し  
神社ありしとありしとありしと



塊くわいと獲えりせまじりてまじくもらへひくれつと云ん  
と老らう夫ふうを尋たずねに今いままてそふありし何なに地ぢのゆき  
けりしうほわよまけりし餘あまり不思議ふしぎなるもの  
ありしとて村里むらのそまじりのんん問もん求もとめりかど  
老人らうじんハ曾そてちりりかきとまじりしはまハありし  
熊野くまの権現けんげんハ出での曼荼羅まんぢらと本地ほんぢママして毎日まいにちハの  
心こころ来臨らいりんしたまふと傳つたへきけりしとまじりし  
権現けんげんの助力あしきセセしはたふもれりしとて尊たかかりし  
この神かみの似にけりし色いろのまじりしあまはてハなまやわし

件けん乃の塊くわいと何なにとて又またくもらへひく違ちがハけりし前まへの  
り画師えし巧たくま乃の叶はけりしハ出での奇特きせきと施せりし  
はましゆとありしりりしとて海うみのくかどは  
同年ごんねんは十二月じふにがつハ又また修復しゆふせし成就じゆじゆし  
文龜ぶんき年中ごんねんの覺かく円えん比丘ひく尼にの願主がんしゆとして後ご相原さうげん院いん  
乃の震ちん翰くわんたけりし新しん曼荼羅まんぢら乃の再さい修しゆハ同年ごんねん十月じふがつ  
十五日じふごにち了りやうり初はつて次つぎ乃の午ごの年ねんハ二月ふたがつ十五日じふごにちの年ねんハ  
又またわきよ一丈五尺いちぢゆうごせきの大おほ變へん相さうとてりし末代まのよひハ  
副室ふくむろりして寄附きよづりしりりしとて重かさ新しん曼荼羅まんぢらと



中しきむらふよむら 慶相ハ銘文古例乃りて  
いしむらふよむら 當今乃帝の御自筆深也  
たふらふよむら 上人の御と朝廷より許す  
るむらふよむら 勅許すして震翰の銘文版  
下され又もくも貴かりき賢聖乃其臺に占慶  
相及し件ハ新圖兩幅の御御の玉の清冠傾  
るむらふよむら 追衛乃左大臣とてしめして諸客  
百官の御拜せむらふよむら 天和の御し  
洛重山科乃御了空也上人乃旧跡竹蔭茂

荆乱を埋むたむらふよむら 様とて本朝弟  
二乃導師といひぬらふ東山西光寺におお入滅  
すむらふよむら 一代集乃中の拾遺集よりりしむらふ  
すむらふよむら 久くくむらふよむら 哀るる  
衆縁をたむらふよむら 再い念佛清浄れ道場を建  
むらふよむら ぬけ何空也上人の石碑門境の所  
かむらふよむら 移んとせし御乃老若はくみ  
石塔ハむらふよむら 追付しむらふよむら 崇  
繁熱瘧病狂乱せしむらふよむら 一人も











京三条やうす丸通へ入る町 柵屋寺と兼ていふ者たはく  
元福寺の比叟よりうし 天教とて家傳の宿  
るりよき時とて下女に所しき者少て何處に  
那に後の世乃ゆり入るき當途にすんやと問せられ  
女にうき我日蓮宗ゆくは題目の唱へあり  
おのいりてはびとあまほも退き次乃東天教へ  
い昨夜は教りしに胸さざりおも寝すは  
今にも成のまゝあばいふもやんと業一より  
まゝ父母のいふとせしむるは是れをてうし

願はしくはせめしきとて地り  
天教の所をんて所をの安養世界ハ弥陀如来願  
心より建立しめて彼方の生とていふも  
き自ら浄土也汝の宗首自て崇へるあまハ幸  
吾宗の觀經少も為讀大乘十二部經首題名字  
と流しぬひぬを初て浄土をいふん  
まゝの闇夜に燈を今たりは  
歡喜乃涙油とてはるぬ年二十迄少く今を







ねらひしむれんじのむしきよも多かりしと憂  
ふらむに比山より寺賜りんとありしは  
かくもやうも母と何れせんやと名刺を頼ん  
了らむじとありし定めて餘賫とすてきた  
金三兩ともちしは昔年より主海より取りて伊勢  
太神宮より奉納しせられし信別善光寺  
所よりいりて包食せられしと所の人々情なく  
ゆりりして齊くしはいせ布施物を備れ  
いふはあはれむはうりしはあはれむはうりし

一度の用をみりて外は乞食ふせられぬと  
様いやくぬ人ありしを惜とて菴をすし  
せり同國松本より旧友のまゝ行る傳まり訪ひ  
つりしはあはれむはうりしはあはれむはうりし  
善知識あてにせしその人ありしはあはれむ  
共くすし候と扱て悦ばれしはあはれむ延宝  
年中のゆいにてありしはあはれむ  
幡隨和尚邪宗を教化す  
九洲吉利支丹の宗門發向して政及の妨







あつた云々跡と慕て見し由よと津海山入也  
ひとくち方とびちりありとてまより無常の  
帰るさうりセハヤと日向の下りて正法と親  
演神法也并帝推きたまひまはたの邪徒等  
改悔故伏して淨土の者数千人といはる  
と云ふにその中に辛案人の法はつらうりあり  
阿まうりて立心し捨身しありと云や和尚は  
此後より弘通利益してその靈像を白道寺に  
本尊と何れ奉り又慈母へ起す由ひて別あり

七日ありて法施したるに身七日命たり  
ありて隨侍乃大通法師以葬ありあり  
帝ハすじもかくて平生不物の念珠燦爛として  
かくやあり舍利とありて法をさうりて火中より  
出るはむとれとていへりへちりて今幡隨院の  
重寶にしてありあり  
乞食自害して歌をたはす  
寛文十二年四月上旬一洛東三條橋の下に廿歳  
阿まうりの乞食の女自害してありと云はるに女あり



一首あり

あはれつゝなほけしき母とてはこゝろをなほおぼし  
しほりしる都りかたれもあつひしてまうかきりて  
天上れ津御座おまて及ひく有ら貴き津方知て  
あせりあひて

又  
なほけしき母とてはこゝろをなほおぼし  
しほりしる都りかたれもあつひしてまうかきりて  
天上れ津御座おまて及ひく有ら貴き津方知て  
あせりあひて

あはれつゝなほけしき母とてはこゝろをなほおぼし  
しほりしる都りかたれもあつひしてまうかきりて  
天上れ津御座おまて及ひく有ら貴き津方知て  
あせりあひて

霊合山開唱阿闍梨

開唱阿闍梨、信州綿内村の人也母懐胎れとき  
魚肉五辛は教と食しぬと何となく胸行し  
吐ぬ見生まきてしるも母肉教と食し乳と與れ  
曾て飲けりりまはは悦直人あまのりし  
ヤ一も四歳れ時父月代とせんて之ハ我ハさあ  
りちららとて三里くうり隔一村よあひて  
自ら童頭と判りぬも父母も為方かくて次  
年れも同國の帰命山但唱とて貴キ上人の許







見ゆるまの方より宜しき處たぐひつゝ此邊國乃  
ろりりそそ當歳子の成せるハ馬屋のやうに  
埋めてもいゝのあつぬ上人村のそね家か、これ  
家と神りいふわたりか、も遠ハ成りし何れを  
具合山ぬ石塔と建んとて笠原村横井作たつては  
又海より十餘町の奥ぬ石を建ててありつゝ  
まゝもかゝ人夫之屋千人もかゝらぬらん  
村の者や何れもいふと願状もあつたが  
翌日候へ大雨し件の大石作たあ家の前  
川ぬ流をまゝぬ人々奇異のねし頓て石塔  
かゝるも尾州乃烏頭勘四郎といふ人其妻  
靈念を請て貴きまゝ一日逗留せ  
しめ勘四郎いゝ念て閉唱とやせん野干は  
人の妻子を誑かせしむるとと人々所別  
女もいひぬ、夫某やろくと悪口あり  
くなく飯をくものさし女よりて後おし  
勘四郎大まゝにわたり具合山ぬ請て懺悔  
とていふも大信者なりぬ三河國の何れ者念  
此

見ゆるまの方より宜しき處たぐひつゝ此邊國乃  
ろりりそそ當歳子の成せるハ馬屋のやうに  
埋めてもいゝのあつぬ上人村のそね家か、これ  
家と神りいふわたりか、も遠ハ成りし何れを  
具合山ぬ石塔と建んとて笠原村横井作たつては  
又海より十餘町の奥ぬ石を建ててありつゝ  
まゝもかゝ人夫之屋千人もかゝらぬらん  
村の者や何れもいふと願状もあつたが  
翌日候へ大雨し件の大石作たあ家の前  
川ぬ流をまゝぬ人々奇異のねし頓て石塔  
かゝるも尾州乃烏頭勘四郎といふ人其妻  
靈念を請て貴きまゝ一日逗留せ  
しめ勘四郎いゝ念て閉唱とやせん野干は  
人の妻子を誑かせしむるとと人々所別  
女もいひぬ、夫某やろくと悪口あり  
くなく飯をくものさし女よりて後おし  
勘四郎大まゝにわたり具合山ぬ請て懺悔  
とていふも大信者なりぬ三河國の何れ者念  
此



















一里ふりて日丸洪水一帯に上人お上  
二丈ふりたく二筋乃先つて闇夜とてせし  
驛乃入口お榎木とてまきまきゆりぬ良つて  
大山お多し飛つるあり始め信別とて坐居とて先  
まきまき菴とてつるお民家へおておし  
隣にお人二三輩つるおちちち夜半とて窓乃  
ゆふいとありれとて声つるお乃座とて友とての  
末に戯れおのておひつる何とて物とておひ  
くは戸乃障とて瘦とて裸形おし男とて

おもおしくまておちちちとて念佛と  
おもおしくおぬ上人眺とておちちち村人おち  
おちちちおちちちおちちちの屠者おちちち佛  
菩薩とて嫌とておちちち入りおちちち血脈と  
おちちち乃不便おちちち血脈とて相とておち  
おちちちとて遣とおちちち村人稼多村とておち  
おちちちおちちち三日おちちち川流の馬おちちち  
おちちち兩人おちちち弱とておちちちとておち  
件乃おちちちとて速血脈とておちちち裸とて



来りしもの不思議ありて合て皈くそのま  
村人の言より一人来り貴き血脈のまを多し  
苦患とれを傳りぬと告ぐるとあり 靈合山より  
十二里隔く東下と云ふに孫助とてまの此野上  
て令りき者上人へ詣て教化す違へき便りあり  
しし只り多き言ふくありてその日山より来  
て伐るる何となく類に秘して斧を枕りし  
所をぬむ上人血脈をぬむを来りぬむの志  
いと妙なりありて此を學ぶと真すとありは

夢の女ぬ孫助の言ありてを命くおのひく岩  
にぬりせありこれより拜しあふんそと垢離を  
りり居るある村に者来り昨日其合山へ歸り  
くに上人机り倚りし海どる海也汝が村小  
孫助とて貧人たりやと問せぬれ者に去るを  
授るんたにや又届らぬと修るまこして血脈を  
もちて孫助に傳りあるあり菴室の下に三丈斗  
乃大蛇候し参詣のまの怖るきておのまを  
免しぬむるまに一人ありてハ上人の膝を



枕こしして卧居ありてなりし内は、  
墓所を通りて、  
長一尺なりぬ、  
貞享元年正月に、  
二月二日に講あり、三日、  
圓く聞參詣れ人々も、  
儀に正して佛を、  
了り只今往生なりと告、  
偈と唱へたりて、  
十念と、

いぬ村人うらひして八幡院、  
御心を、  
乃、  
ひき前ふまれ、  
て合掌、  
いぬ春秋、  
頌西身、  
常州江戸崎、







然了 沘陀尊影出来りせたまふ又程ちうき金井  
とり村乃百姓ぬ家了りあつ通夜念佛をい  
禎障子了忽然と丈六れ尊影所りぬせね  
て今ぬりり巧多河頰西にたりぬ耳俄く聾て  
良巧て頻りぬ鳴りとて和きぬれを何やん  
物れをいしと見しぬ小片も卧形に佛像ふ  
似る舍利了りたりに

三海上人軍と初る雷と鎮す

下総本栗橋行念寺に開山三海上人ハ木食に

竹林中三年がる起立れ行とゆめ湯殿山  
年詣ていていじき高德了りておりの下野に  
壬生乃邊三年うちつき早して軍人甚くはし  
し何多河上人と拓き雨れいのりて請るに我れ  
りハいづらる早魁かりとも降ぶともあな  
と宣ひしと妬しくはる候多かりし上人七日  
以食し丹心と授てふふり弟七日よおもひ  
うがほれちりしとちりしはかの妬候も  
傘とけし木履とるいと来りてるに



朝呼しあがりて末に刻むるまに晴天に  
黒雲あつて雨車軸を流しあれを波増た  
ふちりて飯りある又幸手れ込りあがりて雷  
神を鎮しあひ社を造営せしめあつて  
とくは人の幅ひろしとを産する年より  
とくはあれをよとくすあひしとてかたは  
地を復すべし若くは雷れ禁りに合せん  
示るあしとくすしとてあつてあつて  
うばあしとくすしとてあつてあつて

雷電庄屋の家アノ松鳴くは久くよ七日七夜也  
庄屋十方あつてあつてあつてあつてあつて  
アノたの先非と悔しとバいよと新り飯くれ  
とくす

父誦經娘咏歌

遠州中泉より一里むかり南品田村方迄  
ハ三年有余集れ此より阿弥陀經と讀誦し  
日あつてこころよくなつた砂とみえ教とあつて  
修練しての後睡眠の所とも於居れ







き息と辭しつゝと主人立後甚しくて閉  
門せらるゝ心やとき備ふまづひくが  
たでれ粗増ハハるを故つんと詞とちひく  
たつはもれど左何うバ流らん自ハ上松靈政  
れ嫡孫にしてその刀ハ代持傳へし扇名乃  
姓号ハ豫念了假任也在名ありとくり  
くひひしけり主人もひそめて夢いひる  
ハを傳やういふし事ハ多細と問ふ人とも  
頭とあがりしつゝとれ逃き宰相公にしし

てハ氣と下座了置るや上座にひく問ふは  
らりし其の逃りてかゝるれどハ氣あふ乃  
辭退もかく上座にかたり委細了り作りし  
宰相云も對せ少くは逃るては然の位大  
ワ傾地の内了在宅ありはよとて津條下  
をよとて二百石もぬりしとあん

超譽松と植蛙の喧く鳴と呪す  
大坂谷町了八町目願生寺起譽ハ陸乃  
念仏の寄解ありしは寺本ハ美房はていつふ



三間四面のつゞき乃一宇なり也一々今公殿  
方丈庫裡まで悉く成辦しありこの修管乃  
とくはつくり根をきねて二茎門境を植ゑし  
寺門繁栄せしむるの松盛長すべしと自祝せし  
しみ果して辭茂し今大木となり又垣向ふ  
間瓦の葺と古にありて度れば中に蛙群  
鳴き喧しありあはれむ十念をまゐりて停止せし  
りし生涯のうらみありて鳴けりし元禄九年  
八月七日壬子系はく頭め減後の葬式と宮に

前十一日より安善に聖衆れ數り入るるを  
て貴く念ふしてせりぬ

安藝以八和尚

蘇州多福光明院の開山以八和尚八奥別磐城乃  
人あり其の母子ぬるまを憂て辨財天女  
祈誓して桶了水とて頭小戴き足と翹て  
月影とるりし宿しありし奇端とひて徳生  
しを自ら法より出家しありし徳あり  
りあり加藤式部太捕りの不信人ありしを



いふも偽と試んとて招請りて齊と設ちて  
家老三人相伴小くこれ其旨意をいふ  
真鳥と料理一斷色ある女子あま一人のみまらる  
羅と志せし給仕りて土の隙より伺ふ  
少く和尚自若くして志しく眼を閉る  
料理する真鳥はたたまちりて飛躍り給仕る女  
子ハ看く骸骨とありぬを捕殿大いし  
わきれ即進り政物業心  
和尚教化念比りし  
いひてま

いふも偽と試んとて招請りて齊と設ちて  
家老三人相伴小くこれ其旨意をいふ  
真鳥と料理一斷色ある女子あま一人のみまらる  
羅と志せし給仕りて土の隙より伺ふ  
少く和尚自若くして志しく眼を閉る  
料理する真鳥はたたまちりて飛躍り給仕る女  
子ハ看く骸骨とありぬを捕殿大いし  
わきれ即進り政物業心  
和尚教化念比りし  
いひてま



童子と語りしに経社とて先なるありし所初て  
きしとてや之後一千日お念仏と修く事  
八百日とせぬるらわ者鳩乃社人たよき數人  
一掃く夢れ告りて残る所の二百日ハ社内にて  
はとてきりし示現ありしとて度々を以て  
一のバトとてその所の念仏と社内にて  
はとて又百五日程終く和尚たりとて靈  
をれりし初て回向れ日にしとて生すは  
歩りしは遠道ふきと道俗ありしものなり

その日れ日中群集れ者高き一十念授  
て大往生とてかありし紫雲西方より靈  
天華妙香微妙なるもの也老少皆是候所  
ありし時骨とじり取て結縁せん待たし  
了候し潮をぬきて来て一点の餘灰もかり  
皆海中に流さるしとてん室に龍神は供  
養せしむるもおぼへてお貴し

伊豆即往法師

伊豆即往法師ハ弊州の遠道とて長く名を



久由多とヤしきい川乃此よりる候はあはれなる  
真鶴れみ味甚左とよまの、船頭とあり候は  
海とておろしして世とておろしする事ある候は  
風雨ししすむにぬや破却せしとて海とてあり  
りくを幸き命を免まぬ木の河にまじり候は  
木の身下養んとしてや候はよき業とあり  
はとに拙き候はあはれや今よりして緞ひ立取  
飢渴斬害と候はよき事候はあはれ候は  
ゆききと自誓と立まると念佛門とあり偏

西方と移り候は、鶴と若屋とて海とてあり  
はとにぬしと人の心とてあり候はあはれ  
究竟乃道場ありと一椀の飯とてあり候は  
甚たあはれとあり候はあはれ候はあはれ  
候はあはれ候はあはれ候はあはれ候はあはれ  
海とて藻とてあり候はあはれ候はあはれ  
候はあはれ候はあはれ候はあはれ候はあはれ  
候はあはれ候はあはれ候はあはれ候はあはれ  
候はあはれ候はあはれ候はあはれ候はあはれ  
候はあはれ候はあはれ候はあはれ候はあはれ



て里へかゝるく食物を乞ふくまじしや。おほのめ  
念仏乃々念絶るるありしとあり。在るは後二千  
月日回向とほまらふ。一毎夜燈三々四々あり  
し。成りあり。夏こしきりし。後人後大恐  
とありて。備は。田原はまあり。新へけし。此  
小田原より二三里にて。松田の淨刹とて。禪寺。  
悪心乃作れ。弥陀尊なり。修約は。爰に如來の世  
のまゝ。鶴の岩屋。即往が許へ。ゆへんと告る。ひの  
數度。す。む。び。く。だ。拾。金。や。く。を。檀。那。れ。百。

す。む。と。や。と。と。バ。又。ん。く。れ。人。も。件。は。由。多。志。り。  
そ。預。て。か。の。本。と。ら。ひ。り。め。如。來。を。贈。り。奉。り。し。ふ  
船。以。久。家。と。名。を。れ。む。と。て。ハ。雜。言。り。と。云。ひ。ん  
了。後。人。の。名。を。と。り。り。大。詳。了。か。り。て。は。め。り。  
安置。し。あり。此。と。き。始。て。如。來。り。の。名。を。毎。日。し。と。  
即。往。と。り。じ。あり。三。千。五。百。名。れ。と。も。不。思。岩。屋。を。出。て  
赤。澤。の。後。也。少。や。り。い。ら。る。菴。を。む。す。び。初。念。法  
の。り。と。め。念。仏。し。あり。村。人。兼。て。き。つ。む。び。尊。き。  
大法師とて。日々食ふり。と。わ。ら。り。ぬ。岩。屋。の。本。を。む。び。ふ。



佛具ホハ漢人の文ありひくしてほり近き像をその  
西念寺よりおとめあり何多時素以て平井くよに  
熊野権現宮より多本地球法陀佛を所く  
ありらるるに里人のゆめ了告をあるの黙止  
かしくほり即往の菴よりいせありるき  
抹香ともいふありて内へ筆をたはらるる  
木より心ゆらちるるをいふは妙も當り  
之より多し取らるるを思ふは朝の好  
玉の管よりて観音の靈像よりくあり法師是

毛玉のきりりと思ひて老るる聖朝一人は山素  
我の侍の使傍也昨夜の物やと宣ひては  
りくせさせたまふ又何者も志れはるる  
乃供物まのせんをとおしと何心なく  
秘授せしきこれ悉く舍利あり伊豆  
相摩れ能くなる傍より訪ひてはるる  
いふいふにらるる舌やありて飯を元録  
十羊了箱根塔峯の融辨上人より念に其  
秘と述りたり今五日三日日ほどおと



云一故藝と考へし半有餘も何人母  
あつ果てぬれ面相りし以後二三年後といふ  
貴く往生せしころ也

山崎宗鑑

宗鑑法師は近江源氏あつ傳本族一族也志那  
活多勢重といひし近江の比古角高野甲賀山  
つし等よりあつし將軍義尚公軍勢を率い  
池邊釣里陣中にて薨すもいある時範重  
供奉せしけりし時とあつし世はあつ成りて吾

頓て警を切り武門と出攝州尾ヶ崎に閑居せし  
後山崎御了遷り蓬窓の中に風月を弄し  
滑稽れ及ぶ富り筆及ハ一流の祖より唐土  
人女流と着て瑠璃れ多々金仏と置く多  
譽しとわたり油筒と譽て世に業ト  
朝多夕あつハ鳥目十銭づゝ  
室ハ素権一つより外ハ畜る物多額に掛ら  
上客多傳り中客日傳り下客傳り多  
戲僧遺書



泉州境の真言宗の僧をよほせ暗て暗し毛碑  
此經よりなきて只戲ま言のよめて世をわらぬ  
然れ先泊然とつぎよきて祈禱今もあつる人こ  
崇にけ偽身海よりて後遺封といふもあつる寺  
と書籍といハ甥の偽みねくる金三百兩ハあつる取に  
得さす出家れ財宝ハ福の基也衣服ハ此れハ  
つゝハと辭世了

世の中ハあつてなつてなつててらるる松風  
木村長門最期雪操

大坂の城今と限りぬと一処ハ木村長門寺風呂に  
髪をたたくいづく伽羅をたたくまじり江口の曲舞紅花  
れまね朝と誼い餘念多く小鼓とくまじりまね  
吹の白花やうらり討成さき一印と 大將軍  
家康公沖流えよきて涙流さそよぬいけ若者討成を極め  
髪を香とよめあつて月代と刺成りしと信らぬ  
とくやまの髪をすき香と焼く女ハはる少くよ原  
意運とらふ糸科の伯母少くなりし老後とて常に  
かゝるまじり



















新著聞集

勝蹟篇第六

江戸堀田

文晁舊跡

尾州生灰川讚談橋

真州蛇塚

伊賀國兼好法師塚

判官屋敷苔燈の洞

信州七嶋犬房九塚

信州洗馬茶師長廊

紀州車塚

出羽湯山高中大蛇

甲州祐成寺の来由

下野古河頼政神祠

真州信支文支摺石

信州諏訪七不思議



奥州外浪屋風呂由

奥州霊池示願成不

日向袂帝石の文孝

阿闍梨池極地多礼

天狗一夜造法燈寺

芥川千代古道本説

尾州琵琶湯七思里

伊豆洞中佛像放光

頼政蒲前伊豆旧跡

錦織寺号由錦織支

信州駒嶽化馬入雲

九百年來賣家

口々

翻載第六

陸奥開集

江戸櫻田

江戸市々田川虎の門より愛宕丸邊りまで田代

畔より瑞の末いく千万石を植りし田代中流

と市々川より今川源介橋より

と

信州洗馬茶師長席

信州筑摩郡洗馬村光輪寺茶師如來と今井四郎

兼平少く信州日参寺より風氣を

とて若佐より道一里江府廊下と造り法座



礎れり今了りしと云

文覚旧蹟

信州之遠也文明寺今峯山寺といふ寺は不動尊

ハ文是上人の自作なりといふ建福寺ハ獨鈷水と

いふ井ありこれも上人の作りといふ常恩寺今

ハ蓮華寺といふこれハ上人の塚ありし處にて身後

かりぬひしと云

紀州車塚

紀州の山より懸崖石を削りて神美寺ハ往昔大磯の

虎尾より成て懸崖石にて車と曳岩を村より

限り煩ひしと邊りも羨心者ける様とて今ハ

権現への志も叶はざりて衰れぬとて懸崖三山は体

相と画て拜せりしと云結縁より遠きありける

よして女を合せ打溪谷も經と誦し念佛して程なく

空しくありし此のなまじも車も昔より其こそありぬ

塚より遠くより車塚といひ一里人をもろくに衰

了らばひしと云三懸崖をけりしと云りて事ハ件乃

發に者の菴と神美寺と号すぬかの車にハ妻は十郎



形見の太刀を此の由りて作りして実物よりし  
今より作りしとらん

尾州生衣川讚談橋

秀吉公小田原北条退治に時堀尾銀助とて生年十五  
歳より人の多し駈むい討死する此の母獨の  
子と前立てたりしを奈了菩提のたより尾州藝  
師此中より流る川に橋をけし是とて生衣川  
讚談橋とよみ

出羽霧山品中大蛇

出羽の國きり山の嶽ハ大蛇巻石てる薩交しとら  
いひゆりしきまば巨巖に真中に橋長く堅て四寸  
より五寸まで下りし其のまき垣とゆい注連せり  
蛇の生る蛇は口を内せりハ黄をりて石疊の  
人から鳥井左京喜殿の祈願に  
家臣言津五郎とて一人在蓋了越り  
又作りぬりし

奥州蛇塚



奥州二松松原垣田郡多田とよ西の明神のおいでなる人  
三石人とのこの蛇と報しなるまより蛇群りまより  
おのまこと腹を噉破り丸を一万とありやう上り  
重り成しなるえんかうのにけりびそはまゆ蛇塚  
そそ今よりけりかの報せし者ハ程なく一家としり  
ほろびえきりいらるあきうけりあん

甲州祐成寺の来由

何れ龍僧唯一の境界にて襦子と肩小の多相州相  
根山とこりあるに日景いさる午の卯うんとけり

きりり俄る日くれ黒暗くらり目物もあしぬぼりて  
一足もひきまけりしはけりくけりいけり是非なく  
と何れ木陰の石上り坐し心とあしし佛名を唱り  
誰れ方とやうり究竟の仕太刀とえきよめり  
るのこの草鞋とより松明よりきて一文子に馳せり  
誰よりきき若き女たれごとけりまけり中りくさり  
君より仕走のいさく法師ハ甲斐國よりゆきはる  
けき信玄の傳言とべり通しけりいさ其ハ曾我  
祐成とてけりしうきちなるハ妻乃虎信玄ハ我弟の時



宗<sup>ひ</sup>のり<sup>り</sup>の<sup>り</sup>か<sup>り</sup>き<sup>り</sup>ハ<sup>り</sup>若<sup>り</sup>の<sup>り</sup>う<sup>り</sup>け<sup>り</sup>は<sup>り</sup>山<sup>り</sup>の<sup>り</sup>つ<sup>り</sup>て<sup>り</sup>佛<sup>り</sup>經<sup>り</sup>を<sup>り</sup>よ<sup>り</sup>し  
佛<sup>り</sup>名<sup>り</sup>と<sup>り</sup>唱<sup>り</sup>す<sup>り</sup>の<sup>り</sup>切<sup>り</sup>は<sup>り</sup>不<sup>り</sup>ろ<sup>り</sup>ず<sup>り</sup>小<sup>り</sup>の<sup>り</sup>び<sup>り</sup>し<sup>り</sup>今<sup>り</sup>名<sup>り</sup>將<sup>り</sup>と<sup>り</sup>す<sup>り</sup>  
り<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>は<sup>り</sup>人<sup>り</sup>の<sup>り</sup>崇<sup>り</sup>敬<sup>り</sup>を<sup>り</sup>も<sup>り</sup>又<sup>り</sup>仏<sup>り</sup>及<sup>り</sup>く<sup>り</sup>た<sup>り</sup>う<sup>り</sup>て<sup>り</sup>い<sup>り</sup>じ<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>  
り<sup>り</sup>の<sup>り</sup>な<sup>り</sup>を<sup>り</sup>く<sup>り</sup>ね<sup>り</sup>る<sup>り</sup>一<sup>り</sup>某<sup>り</sup>ハ<sup>り</sup>も<sup>り</sup>之<sup>り</sup>の<sup>り</sup>纏<sup>り</sup>縛<sup>り</sup>を<sup>り</sup>ひ<sup>り</sup>き<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>  
今<sup>り</sup>の<sup>り</sup>黄<sup>り</sup>泉<sup>り</sup>を<sup>り</sup>た<sup>り</sup>ら<sup>り</sup>し<sup>り</sup>三<sup>り</sup>途<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ち<sup>り</sup>ゆ<sup>り</sup>を<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>て<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>る<sup>り</sup>  
修<sup>り</sup>羅<sup>り</sup>闍<sup>り</sup>諱<sup>り</sup>の<sup>り</sup>苦<sup>り</sup>患<sup>り</sup>を<sup>り</sup>も<sup>り</sup>く<sup>り</sup>る<sup>り</sup>を<sup>り</sup>願<sup>り</sup>く<sup>り</sup>ハ<sup>り</sup>我<sup>り</sup>為<sup>り</sup>に<sup>り</sup>精<sup>り</sup>舍<sup>り</sup>  
一<sup>り</sup>守<sup>り</sup>造<sup>り</sup>堂<sup>り</sup>して<sup>り</sup>菩<sup>り</sup>提<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>向<sup>り</sup>た<sup>り</sup>ぬ<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>を<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>け<sup>り</sup>た<sup>り</sup>く  
ま<sup>り</sup>し<sup>り</sup>の<sup>り</sup>が<sup>り</sup>傍<sup>り</sup>の<sup>り</sup>う<sup>り</sup>く<sup>り</sup>安<sup>り</sup>き<sup>り</sup>坐<sup>り</sup>す<sup>り</sup>に<sup>り</sup>侍<sup>り</sup>し<sup>り</sup>の<sup>り</sup>證<sup>り</sup>拠<sup>り</sup>  
と<sup>り</sup>ハ<sup>り</sup>西<sup>り</sup>引<sup>り</sup>の<sup>り</sup>り<sup>り</sup>ん<sup>り</sup>と<sup>り</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>ぬ<sup>り</sup>も<sup>り</sup>是<sup>り</sup>を<sup>り</sup>た<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>る<sup>り</sup>也<sup>り</sup>と<sup>り</sup>て

自<sup>り</sup>費<sup>り</sup>片<sup>り</sup>し<sup>り</sup>て<sup>り</sup>お<sup>り</sup>く<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>き<sup>り</sup>と<sup>り</sup>お<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>す<sup>り</sup>は<sup>り</sup>又<sup>り</sup>と<sup>り</sup>い<sup>り</sup>ひ<sup>り</sup>も<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>ぬ<sup>り</sup>  
持<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>す<sup>り</sup>の<sup>り</sup>白<sup>り</sup>日<sup>り</sup>か<sup>り</sup>る<sup>り</sup>人<sup>り</sup>馬<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>を<sup>り</sup>せ<sup>り</sup>て<sup>り</sup>あり<sup>り</sup>僧<sup>り</sup>思<sup>り</sup>ひ<sup>り</sup>き<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>て<sup>り</sup>  
甲<sup>り</sup>陽<sup>り</sup>に<sup>り</sup>越<sup>り</sup>て<sup>り</sup>お<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>く<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>便<sup>り</sup>を<sup>り</sup>も<sup>り</sup>て<sup>り</sup>信<sup>り</sup>を<sup>り</sup>へ<sup>り</sup>お<sup>り</sup>く<sup>り</sup>と<sup>り</sup>し<sup>り</sup>入<sup>り</sup>  
一<sup>り</sup>の<sup>り</sup>バ<sup>り</sup>件<sup>り</sup>は<sup>り</sup>自<sup>り</sup>費<sup>り</sup>を<sup>り</sup>も<sup>り</sup>て<sup>り</sup>不<sup>り</sup>審<sup>り</sup>き<sup>り</sup>の<sup>り</sup>う<sup>り</sup>な<sup>り</sup>ゆ<sup>り</sup>く<sup>り</sup>  
秘<sup>り</sup>蔵<sup>り</sup>の<sup>り</sup>腰<sup>り</sup>地<sup>り</sup>に<sup>り</sup>お<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>ぬ<sup>り</sup>る<sup>り</sup>も<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>は<sup>り</sup>片<sup>り</sup>言<sup>り</sup>は<sup>り</sup>自<sup>り</sup>費<sup>り</sup>に<sup>り</sup>て<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>し<sup>り</sup>  
う<sup>り</sup>は<sup>り</sup>是<sup>り</sup>奇<sup>り</sup>特<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>る<sup>り</sup>も<sup>り</sup>と<sup>り</sup>て<sup>り</sup>傍<sup>り</sup>の<sup>り</sup>塵<sup>り</sup>美<sup>り</sup>を<sup>り</sup>も<sup>り</sup>く<sup>り</sup>頓<sup>り</sup>て<sup>り</sup>一<sup>り</sup>  
字<sup>り</sup>を<sup>り</sup>い<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>し<sup>り</sup>祐<sup>り</sup>成<sup>り</sup>寺<sup>り</sup>に<sup>り</sup>号<sup>り</sup>た<sup>り</sup>ぬ<sup>り</sup>り<sup>り</sup>を<sup>り</sup>し<sup>り</sup>う<sup>り</sup>も<sup>り</sup>星<sup>り</sup>霜<sup>り</sup>  
良<sup>り</sup>古<sup>り</sup>て<sup>り</sup>破<sup>り</sup>壊<sup>り</sup>す<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>び<sup>り</sup>し<sup>り</sup>バ<sup>り</sup>元<sup>り</sup>福<sup>り</sup>寺<sup>り</sup>に<sup>り</sup>て<sup>り</sup>し<sup>り</sup>る<sup>り</sup>は<sup>り</sup>何<sup>り</sup>の<sup>り</sup>  
ま<sup>り</sup>く<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>縁<sup>り</sup>起<sup>り</sup>の<sup>り</sup>い<sup>り</sup>連<sup>り</sup>珠<sup>り</sup>武<sup>り</sup>に<sup>り</sup>一<sup>り</sup>再<sup>り</sup>興<sup>り</sup>に<sup>り</sup>就<sup>り</sup>て<sup>り</sup>し<sup>り</sup>る<sup>り</sup>



松平攝津守殿きこしめさる武田越前守殿へも  
いづやと尋ね多し一うだ地の目貫しれ其の腰  
乃おろしめせしそてせしめふり金儲龍らりし

伊賀國兼好法師の塚

伊賀のふ所詳教多形庵村乃内國見山了吉田兼好  
塚乃り世のきりしに松のりし寛文七のりし土民も  
塚せりしそがしてこれ心はあきあきりいかにひり  
はめそ下に大木れ親そりて中に鏡とありし  
けら村中多く煩く何神子とよせてきしし

塚せ前口一をぬ少しなりしと云し地底乃るき  
去昔あまのぬいせりし旧跡と容易く堀へ  
きりりしそ本れしにたさめなりし是後西れ  
双丘了無名ふとつたしと所々の家た集た  
記さるししそしそ其の比乱世了てか所新  
りそし人けましやらんいと不審きりり

下野古河頼政神祠

源三位入彦自害れ所等了りしれあらハ我首  
さして隠しけりしもおめりし我らんとけり







くわい行て瀬乃上より取乃山れ下れ島にりけ  
石れ面と措てくれむ以やの親族乃形巧りりく  
として人々河のまうて田島の損止多かりれを今ハ  
此の島の中より埋こども

信州七島大房丸塚

ひし曾我兄弟夜討乃時五郎時宗生捕せしに  
祐恒が子大房丸扇して五郎の面せうらりるのを  
右大将きこしゆれ誠了のみ兄弟を振まひ殺せ  
りるゆきまの大房が十歳よりまう親れ敵とせん

者此面と搏とりまのや武士れ及と疎らりり家不足  
乃者我召はるふり叶りりくはても七歳りん更  
遠流せよりの中身色あまうりなにし七時とりしハ故りる  
りゆや幸ひ信州伊奈郡より大嶋流嶋殿島  
小出島福嶋飯島松島と一処おひとりりしに  
上伊奈郡れ内小出宮田諏訪赤本中越より治親  
五卿しりりり西院よりぬりり左遷せりり家来  
棠本城氏へはもまひまうてりりし大房はわ  
赦免ちりして身はりりしと小出將れとあるハ際ハ葬る



それ塚あぶらに燃さるのいしより今にまで絶つ  
次大房に末葉ハ近比へ一とて棠木氏ハ今にありし  
塚氏の端ハ一とていへる残りあり侍りしとあり

信州諏訪七不思議

信州諏訪ハ事双此靈社にして貴きより多かりし  
中におろく七の目で一ゆり一とて七不思議と云はる  
一神占れ祭とりハ三日元日に神おれはは乃氷  
碎り蛙言三つ出ると加樂といふ稱宜れ汲りて  
うりを取おろれせ移おろし候へり板橋と白紙

れ矢り作てあまを射るのあり長官出たす蛙ハ  
國家ハ悪魔のまを侘伏すとて件れ矢せ切捨り也  
一三月酉日ニッあまハ初言りまハ申れ日とあり  
姐十又面り鹿頭七又候へり申に左れ耳  
割り頭のつらじりハ希まハ是と別の姐に備り也  
一七月廿七日神狭山祭りハ必ず三光の拜まさせたり  
一清原りとりハ湖水一面り氷て四日あり下官乃  
稀宜見りゆり氷上り一筋れはとあり何と  
清原りとりありあの方中りまし武井在と栗



林庄子のけニケ下の内より山登りて上は諏訪の内  
衣裏ヶ渡と衣ヶ渡と熊穴の三取の内よりまは  
取いてもよりより山登りて下は諏訪の内より  
鼻と四王ヶ渡と南古の三取の内よりまはす  
るしより衣裏ヶ渡より竹ヶ鼻へ河あがりハ國土安全  
あり衣ヶ渡より四王ヶ渡へ河上りハ中年也熊穴より  
南古へ河上りハ大込より

河上り又ハ原山より取り種々の麻の生すあり  
一葛井乃池乃鼻何色山片目にて河りし名ハ何色池

件ハ石不思議の内より又ありふさ石の後のまよりにて  
あり又ハ石七本とて靈物ありハ石よりハ踏石  
硯石尾懸石ハ三石ハ社内あり龜石ハ千野にあり  
清坐石ハ矢ヶ渡よりあり満珠石ハ大和にありあり  
蛙石ハ有賀峠よりあり千珠石ハ磯並辺よりあり七本  
りつと椽木ありあり檀木磯並辺よりあり柏木  
前宮よりあり檀木社前よりあり幸夷木前宮にあり  
根入杉と柳とハ大祝乃小路よりあり

奥州外溪鴈風呂由



秋馬此けりる付合と来る本と奥州印ヶ候りる為  
と書又書りあつて世の本と合てあるも残りい  
本多く取りしられと拾い何れもて風骨を焼て法  
業り諸人を体俗せしむるものぬりて  
捕まへ又ハ成り一鳳乃吊はして何れあり

尾州琵琶島七思里

人政大臣師長公尾州樂園乃東井戸田了左近  
帰海の時整りし一思里一思里思里と情七思  
乃置きてしりして喜れそ思名もり人思

りせはしり琵琶と形見りあしまたま遊君猶あり  
あし思りし世とくきりし思りし思りし  
はら思れりし思りし思りし思りし思りし思りし  
一首此歌と琵琶乃甲了書りて何れもて思りし思りし  
投空しくありし思りし思りし思りし思りし思りし  
塚りし思りし思りし思りし思りし思りし思りし  
いりし思りし思りし思りし思りし思りし思りし  
國れ名也貢也具一思りし思りし思りし思りし思りし

奥州靈池示願成不



奥州南部領奥郡登和田地ノハ南僧坊ニ  
大蛇ノモアリ何事ニても省願ノリハ地ノ  
刀脇指小刀ヲトモ投入スルニ成就スルハ地ノ  
志ノ中ニ付ハ水面ニ流シキ一向叶ノ  
水トヨリ飛ビテハ地ノ

伊豆洞中佛像放光

伊豆浦ノ下田ヨリニ里ニ隔テ一ノ名村ハ  
イノ大なる岩窟アリシ三四月ハ此潮干ト侍テ  
空ヲ見ルニ奥ノ地ノ奥ニ又撰メ

三尊ノ如キニ三尊ノ如キニ三尊ノ如キニ  
光明ノ如キニ鮮ク尊容ニ由レニ

日向釋帝石乃文字

日向乃國ハ幡トイフハ幡ノ社前ノ釋  
帝石ノ堅三丈ニ撰メ石乃ノ上ヨリ至  
下キテ幅七八分ノ破一ニ朝日ノ入  
昔有靈鷲山說妙法華今在  
正宮裏顯大菩薩ノ三分ノ  
世談ノ昔在トイフ







阿闍梨池あじかりの池とも云ふなり又櫻うづも池うづも乃なる祭まつりとて古ふる来まいり  
 ち一いち来まいりしハ八月いしづき御ご祭まつり中なか日ひはしてありし若わ衆しゆ衆しゆ阿あの  
 者ものハ精せい進しん潔けつ齊さいとてハ弁べんをいへ曲まが物ものヲ強こゝろ飯ひを握にぎり  
 盛もりておそ漫まんとしてうづもハ先せん千せん板ばん池い水みづ派は  
 入いる諸しよ人にん切きりてお山やまヲ立たちていふ事こととて真ま中なかとてお  
 二ふたつうははきお一ひと遊あそびて飯ひをたぐり三日さんじつ強こゝろて曲まが物ものハ  
 尊そん比ひ淳じゆんとて今いまハ吾われ光ひかり寺てらへ贈たまへたふ事こととて  
 錦織寺号由錦織事にしきおりてらごうよしにしきおりこと

錦織寺号由錦織事

一ひと親おん鸞らん上人じゆん江え州しゅう妙めう脚きゃく乃なる内うち湖こ水みづヲ先せん物もの生なて  
 渙くわん者しやいと悲かなしむとつとあいておそたけり一心いっしん  
 称せう名なして光ひかりれおん不ふ也や袈け裟さ衣いヲてすくはれはは  
 沙さ陀た乃なる尊そん像ざう飛とべしとて上かみ人ひと此こゝれ像ざうれたあ  
 木き部ぶ村むらといふあり一字いっしをわてへ木き部ぶ寺てらにあり  
 向むかひて宗しゆん了りやうしてありしはははははははははははは  
 宗しゆんのありぬ文ぶん福ふく四年しよんねんのちあ佛ぶつ殿でんのちあ人ひと音ね  
 けきばはははは仁にん答たう和尚わう燭そくを秉もててはははははははははは  
 明めい也や寺てら此こゝ土とち乃なる人ひとも之これぬ容よう儀ぎのちあ女に人ひと也や







丁つあててけ寺ハ幾たび建立するとも火災あり  
 其故ハ開山法燈國師の文を水去り火登と書ハ  
 但け寺一度造営れ志ありハ我造立して復しん  
 ありあり夫もはわろハ燬失すへ但護六堂  
 一字ハありん経此日也まう己来我經をこれ  
 けり昼夜心よりするなし縦ひ燬まう九修造  
 せんり偏了希とありハまのハいり易き事也と  
 願状せりけり去るに経房ハいりぬ人をも問ま  
 され我ハ上列赤木山乃松北坊とすまの也少く

いんをりてゆりありハこれ程の大儀と造営  
 一寺と宣ひりて礼謝了とて兩僧とをりくと上列  
 乃修りりあり赤木山乃りり里人乃松北坊ハ  
 其ハ地れ清くハ大天狗たりてありゆりて舌を  
 けりし怖りありん使せはまめりてハゆりし  
 ぞし識くあり岨とてい蘿挂乃根りりりりて出  
 うらねりし九折あり峻難うり山伏二人出来り法燈  
 寺乃使修ありん入りてゆりり上勢色せりり松北坊  
 きたしとて先立てゆくり金銀珠玉ハ宮殿樓閣



さ金浄土乃莊嚴もつやや目とたどらり肝こひら  
すう珊瑚の傍とけり瑪瑙乃階を上げて松の房の  
清あり戦兢としてせりしる使傍遠境とまの手能  
まぬり浄土建立ぬる入来年とれく此位住ぬも里  
下り里人も言う火を滅一人物とすべかりと遠く  
いひ含らり此の眼げ一金色のいろまじり鼻高し  
しと怖るさ云ふありあり先の山伏三人来り送り  
らをよやせやさるやけり肩よりつみ目とせらてその  
みりも入りけり教へ向に流るき二時どかり虎

空を飛行下りぬる杖もつ足乃地よりつくまゝて  
目とひききれを山伏かちて法燈寺の庭あきまゝ  
あつてはるの此所はゆとやてとれら終末の月日に  
かりしは急き里よりさう祈の者にいひハツセ  
あつてはしる數十百人乃聲して宮本挽音手斧  
龍音とるさうさうさう夜つきていれ七堂伽藍あ  
らありき金銀とるり珠玉とるあきてまらりりや  
言ひみ違ひとらやうて又回福するねびり護摩堂  
ハ恙りく入りあつてはるさうん



信州駒ヶ嶽馬化して雲了入る

寛文四年了尾州より本曾路須見れり所りし大目付

佐藤半太夫勘定方天野四郎兵衛金後天野孫作材木

後柳築弥兵衛小目付真鍋茂太夫等あり本曾路あり

とてあめりし山村甚兵衛家来三人所の百姓と召

はし油が嶽に築うり及ぬとせりし了哉こころ

嶮巖すくやに蘿草とてちてはわりへき大なる芦毛

馬乃首れ毛も尾もゆりたきひき眼れひるるハ鏡

いしくろくく其形相るる人乃れ毛堅ては毛海

然るにか乃馬人影を又て巻れ中大すてあけに登

ましが劇了雲たも覆いせ方とれじりしはの

蹄乃りせとるるに又りありしと也は心乃東れ

あり駒乃りせしより大石乃りまにむて雲はきあり

のけなよりとせしゆりくあり

井川千代古道本説

行平の碓氷乃心とせきつりし井川のよびの古

跡ありありけ敷りては碓氷乃井川子代乃

をなかりし名不りしとせありしとせありしと人



世より多かりし所まハ芥川乃ち幸ハ嵯峨天皇の初  
てふさやほのひーづのち淳和仁明文徳乃三帝セ  
こして光寿天皇乃浄代了りしれ御考、再ひ  
井川乃ち幸りし時の歌多し嵯峨天皇乃御考を  
倭見竹向れ芥川より嵯峨の山とつひひーと暮シセ  
よふり幸るまばみ代乃古名とハ讀し一芥川を  
しりたててヤセーするハいそが御考のりて  
侍りし

九百年末賣家

能登國鴉嶋とりふ酒屋三吾衆とら者れ家ハ  
しり弘法大師乃代了建しりあつはあつはあつ  
改め竹下といひけりし所まハ乃ち家れ造作を  
あちりて一業れをわたりしり歌り  
おねがひ乃たふき雪れあつて下れ七まハりし  
あのみ師のむいしりきりけり人々各空議  
しりきりしり弘法大師乃浄代了りし繪まかりしと



